

想

随



ある留学生

小川 光 暘

昔日のペルシア、というよりも近頃では石油の国としてなじみの深くなったイランから、一人の留学生が大学院の私のゼミナールに入ってきた。

この申し出があったのは一昨年秋のこと、目的を尋ねると、正倉院の文様について研究し、その主たる源流であるペルシア美術との交流を調べたいとのこと、目的ははっきりしているし、日本語の読解力も一応の水準に達しているとみたが、出身が

京都大学の工学部で、電子工学専攻という点が問題になった。

外国人である上に、畑違いのコースから横すべりしようというのだから二重のハンディがある訳で、これはよほど慎重に吟味してかからないと、とんだ厄介になりかねないと判断された。ところが口頭の審査や日本語による筆記のテストなどを重ねるうち、これは案外期待がもてそうだと次第に好感が先立つようになり、電子工学の専門知識の方も、コンピュータによって文様のパターンを計数化するユニークな方法を開発するという本人の主張がわれわれをうならせた。

こうしてイランから初の留学生で、そしてまた工学部から文化史学へという、これまた型破りの院生が誕生することになった。そして一年。彼モハマド・ハディ・イランシアアン君はシアイアン君などとよばれて今や学生仲間でもなかなかの人気者になっていく。努力家でもあるが勘のよさが抜群で、言葉や文字だけでなく、日本の伝統文化も手当りしだいに吸収してしまう。篆刻などもすでに玄人に近く、私の落款は

大学新町別館

昨年一月より建築工事がすすめられていた大学の「新町別館」(新町校地北西角に所在)は、一九七四年十一月十五日に竣工、同月十八日より利用が開始された。

新町別館は、音楽・演劇関係サークルの総合練習場として建設されたもので、鉄筋コンクリート造、地下一階地上五階床面積延約三、七〇〇平方メートル(約一一九坪)で、冷暖房・防音装置が完備されている。

地階から四階には音楽、コーラス、演劇の大小練習場、小ホール、放送局分局等があり、五階には文連本部、音楽・演劇関係サークルのボックス等の施設がある。

各階の主な施設は次のとおり。

(地階) 音楽大練習場、放送局分局、電機室、ボイラー室、(一階) 小ホール、管理室、(二階) 音楽練習場、(三階) 音楽・演劇・コーラス練習場、アトリエ、(四階) コーラス大練習場(五階) 音楽・演劇関係サークルボックス等。

もはや彼の支配下に属しているしまつである。

話にはわかるが、彼の故郷であるイラン高原のシラーズという町は、私にとって思い出の深い土地であった。そこは有名なペルセポリスの遺跡に最も近いオアシスの町で、いわば日本の奈良にたとえられる土地柄だ。もう七、八年も前のこと、私は一人の旅人としてこのシラーズに泊り、そこから一面識もない現地の人たちと相乗りのタクシーを拾ってペルセポリスへ通ったものである。

シラーズからペルセポリスにつづく車道の傍で、虎の姿を大きく描いた立札が目に入った。その辺りは砂漠の中の草原といった感じのところ、人っ子一人いない草原の樹林の中には今しも飢えた虎がひそんでいるように思われた。猛獣との格闘をモチーフにするペルシア美術の連想もあって、これは「虎に注意!」の警告とみてとった私は、わざわざ車をとめてもらって写真にとった。後日講義の材料に役立つだろうとも思っていた。

つい最近のことなのだが、世界の博物館

と美術の遺跡について講義したついでに、ペルセポリスへの道と例の虎の絵のスライドを映写して、居合わせたシァイアン君に同意をもとめてみた。

「あそこに虎がいるんですか?」

と首をかしげたあげく、彼はスクリーンに近づいて、虎の下に書きそえてあるアラビア文字を確かめると大声で返事をした。

「残念でした先生! これはタイガーという雑誌の広告ですワ……、その字にはミナサンノモノとありますワ……!」

教室は一度にワァ……と洪笑の渦であった。

半可通というものの罪深さはざつとこんなものであろう。ひと昔前に日本文化を海外に紹介した半可通のパイオニアが、どれだけ日本を垂めて宣伝してしまったかは語るまでもないことだが、シァイアン君のように、時として日本人よりも日本に精通した若者こそは、やがては中東と日本を結ぶ貴重な橋がかりとなってくれるに相違ない。この型破りの一人の留学生に私はひとつの夢を托している。

(大学文学部教授・日本美術史)

同志社時報 第53号

同志社人物誌	「水崎基一」	森中 章光
評 論	下村孝太郎先生 —ハリス理科学校と化学工業における創業—	島尾 永康
時 評	刑法改正の現状とその問題点	上田 健二
同志社の学術・文化刊行物	『基督教研究』	藤代 泰三

随想・趣味探訪・その他

1部 150円・年3回発行